

女房装束に関する研究

(要旨)

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期人文学専攻
学生番号：D106894
氏名：周 成梅

日本の女性服飾史において、格調高い代表的な装束の一つに平安時代中後期の女房装束がある。俗に十二単というこの衣裳は、着用順によって袴・単・桂・打衣と表着・裳・唐衣より構成されていた。『増補日本服飾史要』（江馬務）、『日本女性服飾史』（井筒雅風）、『日本服飾史』（谷田閲次・小池三枝）といった諸先行研究を参考にして女房装束の構成要素や女性服飾史を確認してみると、解明不足と思われる事柄や、正すべき事柄が散見される。本論では、唐衣の起源、桂の詳細、打出という作法など、女房装束の特質を論じる上で特に重要となる事柄に論題を絞り、それらについて往時の文献資料等を用いて新たな考察を加える。

一 唐衣の起源

女房装束はさまざまな構成要素よりなるが、その中で唐衣は最も代表的な衣服で、晴の場で着られることが多い。唐衣の成立年代に関しては、先行研究は多く見られないが、おおよそ十世紀中期ごろだという見解が示されている。唐衣の起源については、奈良時代に中国唐より伝わってきた背子から発展したという説が現在の服飾界ではほぼ定説になっている。背子と唐衣との関連性を明らかにするため、まず画像資料や『四庫全書』に収録されている中国側の古記録に基づき、中国の背子は主に宋代以降になって多く現れるものと判明した。また、文献と絵画資料を総合的に調べ、背子の形態や着用制等を明らかにし、宋代における女性の背子は垂領・闕腋であり、丈が比較的長く、裙と同じぐらいのものであったことを明らかにした。宋代の背子は形も唐衣との相似性の低いことを指摘した。その一方、唐代の文献と画像資料には背子についての記録がほとんど見られないため、唐代の背子の形態は判明しにくい。一方で、唐代の半臂は腰丈で、肘の半分ぐらいまでの短い袖がつけてあるものであり、唐衣との相似性が高いことを指摘した。そこで、本論では、定説に対して否定的な見解を示し、その起源が唐代の半臂にあるという新たな説を提示した。

二 桂の詳細

女房装束の中で中心的な位置を占めている桂について、古文書や古記録を調べ、その名称・種類・文様・地質・重ね色目などについて改めて詳細に考察してみた。桂に関しては、現在では「桂」の表記が一般的に使われているのに対して、古文書や古記録では、「褂」の使用の方が圧倒的に多いことを述べた。また、『干祿字書』、『類聚名義抄』、『伊呂波字類抄』、『倭訓栞』などの記録から見れば、「桂」と「褂」とがともに通用していることを示した。そして、「諸于」や「諸衤」などの桂の古い名称は、3世紀までの中国の古記録上で一時的に使用されていたものである。読み方に関しては、「圭」と音読みされ、訓読が「宇知岐」＝ウチギである。

桂の種類に関する記録は、主に江戸中期のものに集中しているが、桂、小桂、大桂との三種類に分けられるようである。その中で、大桂は祿として下賜されることが多く、主に元服、裳着、大饗、朝賀、貴族の御産の祝いなどの儀式の場において用いられていたが、その場合は白桂の使用が頻繁であったことを示した。

桂の地質に関して言及する記録は、故実書や各時代の日記類に集中する。桂の地質として文献によく現れるのは、各種織物、綾、平絹など多岐にわたる。また、桂の文様の技法を記す記録は年代順に『雅亮装束抄』、『紫式部日記』、『台記別記』などが挙げられるが、中には、泥絵、固文、浮文といった技法が見られる。

重ね桂の色目に関しては、全体的な統一感、配色に快い対比感と漸層的なリズム感、また、自然への調和を重んじることなどが特徴的である。

三 打出の作法

打出とは、装飾の目的で、女房装束の裾や袖口などを寝殿造または牛車の御簾の下からはみ出させておくこと、または、はみ出された装束そのものである。寝殿造の打出に関する先行研究は少なく、管見によれば、野田有紀子の「行列空間における女性——出車を中心に」と笹岡洋一の「『雅亮装束抄』の周辺——かさね・打出」とには言及されている。わずかある先行研究を踏まえて、その不備や誤りを指摘しながら、新たな見解を述べた。本論では、寝殿造の打出について同時代の文献資料（『雅亮装束抄』や貴族の日記類）をもとに考察し、打出の作法や実態を明確にした。特に『雅亮装束抄』に記された打出の作法や注意点について、詳しく考察を行ったところ、打出は室内から押し出すものと考えられていたが、室外にいて引き出す人が主となって調整していたことが判明した。

先行研究では触れられたことのない「刷る」という所作にも焦点を当ててみた。「刷る」とは装束を刷（擦）って音を立てることを意味するものと考えられる。『台記別記』には、藤原頼長が社参する日の早朝に寝殿の打出が行われ、その際に打出を「刷る」ことが行われたが、それは打出が整ったことを頼長に知らせる合図であったと考えられる。また『玉葉』の記述からは、打出を来客の時にやり、その際に刷って音を立てることが儀礼となっている可能性を指摘した。刷るという行為は来客が直接に見ることができない場合に、合図として音を立てるものと考えられる。これを裏付けるのは、『兵範記』仁平二年（1152）の正月大饗の条である。東三条殿へ到着した尊者の隨身は幔門に入ることができないため、幔門の外から南庭に入るまでの間は、隨身の警蹕の代わりに尊者自身が衣裳を刷ることを通じて自分の出入りを南庭で待つ主人に合図したことを例示した。また、装束員数が足りない場合、それを背で左右に切断して半分ずつ寝殿に出す記録が幾つか見られる。『今鏡』の小野雪見御幸の話には、それが紹介されている。その現象について分析するうえで、装束を切断した理由をも新たに考察した。

さらに、寝殿造の打出の作法は時代の変遷により変化したことが考えられる。その例として袴の打出に関しては、『雅亮装束抄』には、待賢門院の時より打出すようになったとしており、平安末期では袴を出すのは撰閤家にも広がっていたことを示した。また、袴の打出は撰閤家ではなく、それ以下の貴族で始まったものと指摘した。それに対して、室町中後期の有職故実書である『女官飾抄』には、打出に袴を出すのは非礼とされる。同じく室町中後期の『慈照院殿大将拝賀編目』にも関連記録があり、『女官飾抄』との意見と通じるが、『雅亮装束抄』とは矛盾している。打出に袴を出すのは、平安末期では撰閤家にも広がるほど非常に格式高い作法であったが、室町中後期になると、逆に非礼とされるようになった。打出の作法は時代の変遷により変化したことを示した。

今まで注目を払われていなかった打出を行った人物についても触れた。特に、身分の高い女房が接客中に打出をする例もあれば、男性の下級貴族が室外から打出を刷って調べている記録も初めて紹介した。最も一般的なやり方として、女房が事前に打出をするのであることを示した。

四 牛車の打出

数少ない打出に関する先行研究の中で、特に牛車の打出に関しては、管見によれば、野田有紀子の前掲論文にしか言及されていない。『雅亮装束抄』によって牛車の打出の作法や注意点を詳しく紹介し、分析を加えた結果、それと寝殿造の打出と違いは、牛車では竹を車に刺して糸で装束を留めることによって高い所から出し、揺れてもずれないようにしていたことを述べた。また、それは狭い牛車で重ね目を見せる工夫であったという見解を示した。牛車の打出のなされる位置は、車の前のみ・後のみ・前後と三種類に分けることができる。そして、出されるのは、唐衣・裳・表着・打衣・単・袴など女房装束の構成要素全般にわたり、桂も含まれることを述べた。

五 女房装束の特質

女房装束はその華やかさから単なる飾付けのものと思われがちである。それだけではなく、平安時代後期における男性貴族の装束と同様に、女房装束は身分を区分する役割がある。それは、唐衣の禁色等から垣間見ることができる。また、唐衣・裳・打衣・表着の着用の有無は、晴れと普段の場に応じて変わる。五節の舞姫に「赤色織物唐衣」が特別に着られる事例からも、女房装束は場に応じて様々な形態を現していた。そして、女房装束は日本人の季節の移ろいに関する感性を反映するとも言える。季節季節の自然物に因んだ色を配合する桂の重ね色目がその一例である。

それに付け加えなければならないのは、打出に関する考察から明らかになったように、寝殿造で行われていた男性官人が主体の政治的な儀式においては、女房装束は儀式を構成する重要な一環であった。打出された女房装束が儀式の最中に引き入れられたり、再び打ち出されたりする所作があり、また、女房装束を「刷る」という所作によって儀式中に合図をしたことに注目すべきであろう。従って、女房装束は従来言われていたような役割の他に、平安時代後期においては儀式の進行上での重要な役割があったと考えられる。当時の儀式は、特に宮中や摂関家の邸宅で行われていた儀式は政治の中核をなしていたものであり、それに組み込まれた女房装束は極めて公的な存在であったと言えよう。

さらに、唐衣は中国唐代の半臂が奈良時代に日本に伝来して、基本的な形態を大きくは変えずに平安時代後期の女房装束に残されたことに注意を払わなければならない。一番上に着られた目立つ服飾であったこと、身分の高い人の前に出る場合に必ず着用しなければならないこと、織物など舶来の高級素材を使っていたこと、以上からすると、唐衣は女房装束において最も高い位置を占めた服飾である。女房装束の構成要素の中で、唯一「唐」を冠する名称を持っており、中国起源であったことが当時の女房たちにもよく知られていた。唐衣は中国起源だからこそ極めて公的な服飾と認識されていたと言える。